

令和 7 年 6 月 4 日

丹後農業改良普及センター

農作物の高温対策について

大阪管区気象台による「近畿地方3か月予報」（令和7年5月20日発表）によりますと、向こう3か月の平均気温は、高い確率が60%となっています。体がまだ暑さに慣れないうちに暑熱環境下で作業を行うことが多くなりますので、こまめな水分、塩分補給や休憩を心がけ、熱中症に十分注意してください。

以下の事項を参考に、高温下での農作物の管理と作業時の健康管理等について留意願います。

1 水稲

- (1) 田植え後の湛水条件で高温が続いた場合に、稲わら等有機物の急激な分解に伴って硫化水素等の「ガス湧き」が発生し、根が障害を受けて生育が停滞することがある。葉色が薄く、分けつ増加が緩慢で、田に足を踏み入れた際にブクブクと気泡が認められるような場合は、2～3日程度落水して根に酸素を供給する。
- (2) 苗が順調に活着し、高温傾向で推移した場合には、稲の生育が旺盛となり、過剰分けつや籾数過多を招き、乳白粒等を増加させる事例が見られることから、中干しの徹底等により茎数・籾数の適正化に努める。

2 野菜・花き

- (1) かん水は生育状態を考慮しつつ、早朝・夕方に実施する。施設内でのかん水は湿度が高くなりやすくなることから、曇天時には日中に換気するなどして湿度を下げる。また、地温上昇の抑制や土壌水分の保持を図るため、適宜マルチや敷わら等を活用する。
- (2) 除草や下葉の除去等によって、ほ場内・施設内の風通しを良くする。
- (3) 施設栽培は、妻面・側面を開放するとともに、遮光・遮熱資材等を使用し、施設内の温度上昇を抑制する。遮光資材は、果実の日焼けや葉やけの防止にも有効である。循環扇は、局所的な高温・高湿空気の滞留を防ぎ、室内温度・湿度の均一化等の効果が期待できる。
- (4) ハダニ類、アザミウマ類等が多発しやすいので、発生初期の防除に努める。

3 果樹

- (1) 高温で土壌が乾燥すると、葉などからの蒸散作用が抑えられ高温障害が助長されるため、十分なかん水を行う。この際、時間をかけてかん水し、地下に水を浸透させる。
- (2) 水分の競合を避けるため、園内の除草を行う。土壌の表面の乾燥を防ぐため、刈り取った草を利用した敷草やマルチを行うことも検討する。

4 茶

- (1) 気温が高い時期にはハダニ類やヨコバイ、アザミウマ類等の害虫の被害が大きくなりやすいため、発生を確認し、的確に防除する。

5 作業者の熱中症対策等

- (1) こまめに水分と塩分を補給するとともに、身体を適度に冷やすことができる冷たいタオル等を備える。
- (2) 作業中の温湿度の変化がわかるよう、温度計、湿度計等を設置する。
- (3) 日陰などの涼しい場所に休憩場所を確保し、十分な休憩時間を確保する。
- (4) 可能であれば朝夕の比較的涼しい時期に作業を行い、気温の高い時間帯の作業を避ける。
- (5) 透湿性、通気性に優れた作業服や空調服等を着用する。